

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
15	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Changing drinking pattern does not influence health perception: a longitudinal study of the atherosclerosis risk in communities study. 飲酒パターンの変化は自覚的健康状態に影響を与えない: ARIC 研究	
<b>執筆者</b>	
Eigenbrodt ML, Fuchs FD, Couper DJ, Goff DC Jr, Sanford CP, Hutchinson RG, Bursac Z.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
J Epidemiol Community Health 2006; 60(4): 345-50.	
<b>キーワード</b>	
自覚的健康、飲酒パターン、コホート研究	
<b>要 旨</b>	
<p><b>背景</b></p> <p>飲酒と自覚的健康の関連について多くの報告があるが、飲酒習慣は一時点の情報を用いたものが大部分を占める。本研究では動脈硬化性疾患をエンドポイントとした大規模コホート ARIC 研究のデータを用いて飲酒パターンの変化とその後の自覚的健康の推移の関連を検討した。</p> <p><b>対象と方法</b></p> <p>1987年から1995年にかけて計3回(exam 1~3)、飲酒習慣と自覚的健康状態を把握した12332人の中年男女(平均年齢54歳、女性56%)を対象とした。Exam 1から2の飲酒パターンの変化とexam 2から3の自覚的健康の変化の関連を検討した。両者の関連は、ロジスティック回帰で年齢、性、人種、収入、喫煙、教育歴、肥満を調整したオッズ比で求めた。自覚的健康は、問診の4段階のexcellentとgoodを「良い」、fairとpoorを「悪い」に2分して解析した。解析対象はexam 1と2の間の健康状態が不変、exam 2と3の飲酒習慣が不変だった9272人とした。</p> <p><b>結果</b></p> <p>交絡要因を調整しても、禁酒者、飲酒開始者、継続非飲酒者の自覚的健康状態は、継続飲酒者に比べて低くなる傾向を示した。それぞれの自覚的健康状態低下のオッズ比は、1.6(95%信頼区間, 95% C.I.: 1.1-2.3)、2.4(95% CI: 0.9-2.2)、1.5(95% CI; 1.3-1.9)であった。自覚的健康状態が最初から低かった対象者では、禁酒、飲酒開始、継続非飲酒、継続飲酒の間で自覚的健康状態の変化に差を認めなかった(継続飲酒に対するオッズ比は、それぞれ1.1、1.1、0.9でいずれも有意差なし)。</p> <p><b>結論</b></p> <p>飲酒開始群、禁酒群、継続非飲酒群の自覚的健康状態の推移に差が見られなかったことから、飲酒が生物学的な機序を介して疾病予防や健康増進に寄与しているとは考えにくい。継続飲酒群で自覚的健康状態が低下しにくいのは、心理特性や行動パターンなどの違いなどこの集団のもともとの健康度が高いためと考えられる。</p>	